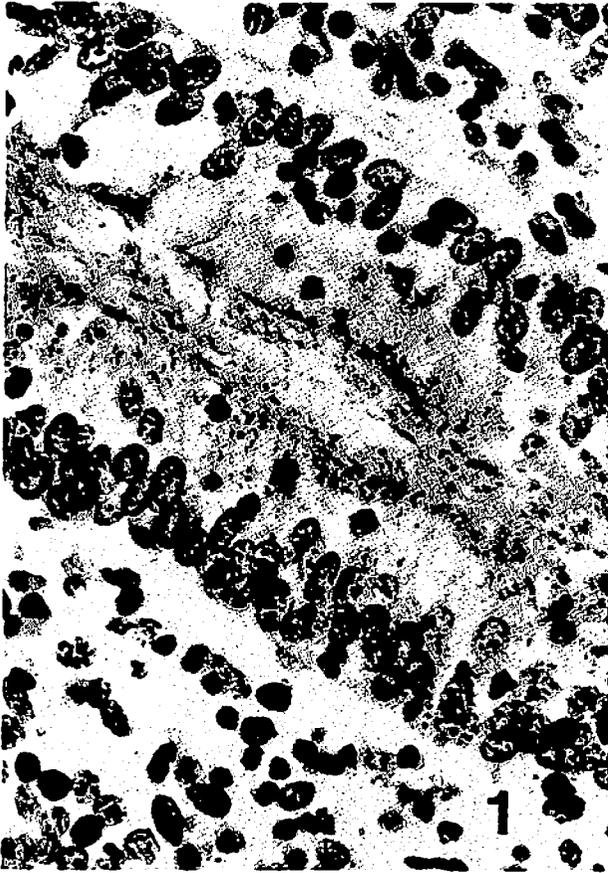


豚の結腸

家畜衛生試験場九州支場出題 第23回獣医病理学研修会標本No.393



動物：成豚，去勢雄，飼育地—鹿児島県。

臨床：生体検査時には著変を認めなかった。

肉眼所見：回腸の末端部粘膜が1 mにわたり肥厚，充血し赤味を帯び，表層には薄いチーズ様物が付着していた。盲腸・結腸の上部粘膜にも軽度の肥厚が認められたが，腔内の糞便は正常であった。

組織所見：回腸粘膜は，腺腫性に過形成した陰窩が大部分を占め，腸絨毛の構造は失われており，典型的な増殖性出血性腸炎の像を示していた。盲腸粘膜も回腸同様に過形成した陰窩が増数していた。

結腸（提出標本）では，腺腫性に過形成した陰窩が正常な陰窩の中に散見されるところや，過形成した陰窩が多くなっているところが混在していた。また粘膜筋板を越えて，粘膜下織にも過形成した陰窩がみられた。過形成した陰窩上皮は丈が高く，先端部には微絨毛をもっていた。核は基底部にあり多数の核分裂像がみられた。杯細胞は減数ないし消失していた。少数の類上皮細胞の結節が認められたが，その意義は不明であった。粘膜固有

層にはプラズマ細胞が散見されたが，正常の範囲と思われた。

Warthin-Starry染色を施すと，過形成した陰窩上皮の先端部細胞質内にはコマ状の小桿菌が多数みられた（写真1，W-S染色， $\times 500$ ）。この菌は形態的には増殖性出血性腸炎の回腸病変部にみられる菌と同じであった。腸管腔に近い陰窩腔内には，豚赤痢トレポネーマに酷似したらせん菌が観察された。このらせん菌は，過形成した陰窩の腔内にもときにみられた（写真2，W-S染色， $\times 1,250$ ）。

結腸陰窩の腺腫性過形成の原因菌である*Campylobacter sputorum* subspecies *mucosalis* とらせん菌との関連性を検討するために，結腸陰窩に腺腫性過形成のみられた18例について検索したところ，12例でらせん菌が観察された。豚赤痢を疑う病変はなく，らせん菌の意義についてはさらに検討の余地がある。

診断：豚の陰窩の過形成性結腸炎（らせん菌のみられる）。